

about幕末

第一項 条約の締結と将軍の後継ぎ問題（1853年-1858年）

嘉永6年(1853年)、アメリカ合衆国が派遣したペリー提督率いる4隻の黒船が浦賀沖に来航し、江戸幕府に開国を迫る大統領国書をもたらした。翌年の安政元年(1854年)正月に再び来日したペリー艦隊は、改めて開国を要求。そして、**日米和親条約**が締結され、いわゆる「鎖国」は終わった。開国以前より続けていた活動は安政の改革と呼ばれ、**勝海舟**もこの動きの中から注目される。日米和親条約では、薪水の給与のための下田(今の静岡県)・函館(今の北海道)の開港と並んで、両国の必要に応じて総領事が置かれることとなり、アメリカは**ハリス**を下田に派遣する。ハリスは自由貿易と開港を目的とした通商条約の締結を幕府に迫る。安政5年(1858年)4月大老に就任した**井伊直弼**(彦根藩主)は大老就任直後の6月、許可の出ないまま**日米修好通商条約**を締結させた。内容は、後に問題となる、領事裁判権を認め、関税自主権を喪失するという不平等条約であり、同様な条約がイギリス・フランス・オランダ・ロシアとも結ばれた(安政の五ヶ国条約)。また、開港はその後に行われた。一方、病弱であった将軍家定に子がなかったため、将軍の後継ぎを誰にするかという意見で対立した。

第二項 安政の大獄と桜田門外の変（1858年-1860年）

安政5年(1858年)5月紀州慶福を後継に決定し、慶福は家茂と改名した(将軍就任は10月)。京都を中心に活躍した工作員らが井伊直弼の指示を受けて、老中間部詮勝(鯖江藩主)らが取り締まりを行った。これにより、橋本左内・梅田雲浜・頼三樹三郎らが処刑され、長州藩(今の山口県)で私塾・松下村塾を開いていた吉田松陰なども、中間部詮勝の暗殺を考えたが処刑された。これらの政治的な弾圧を「**安政の大獄**」と呼ぶ。度重なる弾圧によって水戸藩(今の茨城県)や薩摩藩(今の鹿児島県)の浪士は、密かに暗殺計画を練り、万延元年3月3日(1860年3月24日)、江戸城登城の途中の井伊を桜田門の外で襲撃して暗殺をした(**桜田門外の変**)。幕府の最高実力者に対する暗殺は、幕府の力が落ちることの一つの理由となった。

坂本龍馬(さかもとりょうま)は、日本の近世末期に活動した武士。土佐郷士(今の高知県)に生まれ、脱藩したのち、倒幕および明治維新に影響を与え、木戸孝允・西郷らの立会いによって作られた**薩長同盟**にも関係している幕末の武士である。通称は龍馬。他に才谷梅太郎(さいだにうめたろう)などの別名がある。

ところで、勝海舟との意外な関係を御存知だろうか？ 12月9日、幕府政事総裁職にあった春嶽から勝海舟への紹介状を受けた。龍馬が開国論者の海舟を斬るために訪れたが、逆に世界情勢と海軍の必要性を説かれた龍馬が大いに感服し、自分の考えを恥じてその場で海舟の弟子になったという話が広く知られている。その後、龍馬が海舟に心服していたとのこと。しかし、慶応三年、11月15日、陸援隊だった中岡慎太郎と龍馬が話していたところ、十津川郷士と名乗る男達数人が来訪し面会を求めて来て、従僕の藤吉が取り次いだところで、来訪者はそのまま二階に上がって藤吉を斬り、龍馬たちのいる部屋に押し入った。その時、龍馬達は帯刀しておらず、龍馬はまず額を深く斬られ、その他数か所を斬られて、ほとんど即死に近かった。中岡と藤吉も致命傷を負い、藤吉は翌日、中岡は翌々日の17日に死亡したが、中岡は死の直前まで意識があり、事件の証言を多く残した。